

## 第35回福岡県美しいまちづくり建築賞 受賞作品概要

総評・講評 選考委員長 末廣 香織 (九州大学大学院人間環境学研究院 教授)

### ◆総評

今年で35回目を迎えた本賞には、「住宅の部」25件、「一般建築の部」36件の応募があり、多様な視点を持つ10名の選考委員によって審査が行われました。応募書類による9月初旬の一次審査を経て、8作品が本賞の現地審査に進み、リフォーム・リノベーション作品を対象とする(一財)福岡県建築住宅センター理事長賞候補の2作品も現地審査に進みました。現地審査は11月中に行われ、その後の最終審査を経て住宅の部2作品、一般建築の部2作品、理事長賞1作品が決定しました。

「住宅の部」の大賞を受賞した「HOUSE W」は、隣接する神社の巨木を取り込むように設計されており、狭い道路の環境改善も含めて、住宅と巨木の関係がまちの風景を作っていることが評価されました。また優秀賞を受賞した「見晴らしと暮らす家」は、文字通り見晴らしの良い快適な室内空間と、まちとの連続した開放的なピロティが評価されました。現地審査に残った「高宮の家」「月亭」は、両者ともに非常によく考えられた、暮らしやすそうな住宅でしたが、受賞には一步及びませんでした。

「一般建築の部」の大賞を受賞した「福岡市立平尾霊園合葬式墓所」は、現代的な死と向き合うための新しい公共施設です。自然の丘を時を経ても変わらぬ共有の墓に見立て、祈りのための静謐な空間をコンクリートによるシンプルで力強い造形で作り出しました。その明快なコンセプトとデザインの適切さ、そして周辺環境との調和が高く評価されました。また優秀賞を受賞した「さくさくファーム」は、地域コミュニティの拠点にもなる農業関連施設です。美しく存在感のある建物だけでなく、敷地周辺まで含めて街並みを整備している活動も評価されました。現地審査に残った「天神ビジネスセンター」は、新しい天神の顔を特徴付ける現代的なデザインのオフィスです。「森のおうち保育園」は、周囲の自然環境と一体的に設計された有機的な空間が魅力的でした。両者とも非常に優れた建築ですが、受賞には一步及びませんでした。

「理事長賞」を受賞した「light and dark」は、廃校となった小学校の給食室を改装したカフェです。限られた予算の中で、暗さを前面に出した非日常空間を作るという手法が評価されました。現地審査に残った「Brillia Tower 西新/PRALIVA」は、既存建物の構造体を一部再利用して新しい商業施設とマンションを建築したものです。現代的な技術が生かされたプロジェクトですが、受賞には一步及びませんでした。

福岡県が主催する本賞は、社会的かつ文化的に優れた建築、および建築単体だけでなく地域の価値向上に貢献するプロジェクトを表彰することを通じて、県民の皆様に建築文化への理解を深めていただくことを主旨としています。近年徐々にではありますが、建築のデザインやそれぞれの街の美しさ、歴史性などについて一般の関心が高まってきたように思います。ヨーロッパの街などを旅行されて、その美しさに日本の街並みとの差を感じる方も多いのではないのでしょうか。しかし、彼の地ではこうした街並みを維持するために長年に亘って多大な努力と資金が投じられています。日本でも伝統的建築物保存地区に指定された街が、当初は荒れ果てた状態でも、時間が経つにつれて美しく整備される事例が多くあります。優れた建築とまちは、長い目で見れば地域の皆さんの重要な有形資産です。しかし、より優れた建築や街並みを作っていく努力を続けなければ、容易にその資産価値は低下していきます。歴史ある本賞が、今後さらに有効に活用され、こうした努力を後押しできる制度となることを期待しています。

## 住宅の部 大賞 「HOUSE W」

### ●設計趣旨

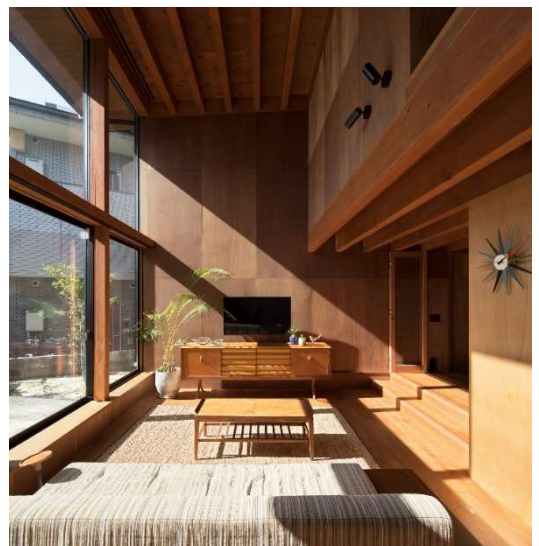
隣接する神社の御神木が印象的な敷地に建つ住宅である。神社の緑を景観として取り入れ、狭隘な通りの印象を改善することを念頭に計画した。建物の軸線を御神木に向けて配置し、通りも含めて一体の外部空間として整理することで、狭隘な通りの印象を緩和しつつ、建物は御神木とストリートに向き合う構えとなる。建物は北側の御神木と南の庭をつなぐ筒状の空間とすることで、内部のどの場所からでも外部環境が感じられる。仕上げは内外とも赤味の木とし、神社の緑と補色関係にすることで、色彩の面でも関係を持たせた。

神社の緑、南の庭といった外部環境を横断するような構えとし、この場所との関係を緩やかにつなげることで、双方にとってより良い環境が醸成できればと考えた。

### ●講評

建て込んだ住宅地の中に佇む小さな神社に面して建つ住宅です。神社には地域のシンボルでもあるクスの巨木があり、それに対して大きな開口を取ることによって、その存在感と眺めを室内へと取り込んでいます。また、狭小な道路から建物をセットバックして敷地の一部を道路状にすることで、地域の皆さんが通行しやすい拡張された道路空間を作っています。木と建物が対になることで、この街角が特徴的な地域の顔となり、夜になると、室内の光がクスの木を照らすことで、美しく安心感のある風景を作りました。

室内は、温かみのある木材の存在感を前面に出し、少し暗い仕上げで統一されています。それでも南側には庭に面して大きな開口が設けられていて、十分な自然光と開放感が得られます。室内の可動間仕切りを全て開放すると、明るい南側からクスの木が見える北側まで風と光と視線の全てが室内を通り抜ける気持ちの良い一体空間が現れます。この可動間仕切りは、季節によって様々に開け閉めして使われるでしょうし、家族が成長して暮らし方が変わっても、柔軟に対応できる仕組みです。少し暗い室内の仕上げ、柔軟な間仕切りと開放性、周囲の自然環境との共存は、実は伝統的な日本家屋が持っていた特徴です。その伝統を現代的な形で再構成した住宅と言えるでしょう。



撮影 : Kouji Okamoto (Techni Staff)

## 一般建築の部 大賞 「福岡市立平尾霊園合葬式墓所」

### ●設計趣旨

核家族化や死生観の変化で、承継を必要としない新形態の墓の需要が高まり、福岡市が平尾霊園に整備した合葬式墓所。かつて霊園を造成する際に削られた山を修復するよう山裾を延ばし、その下に埋蔵室を埋め、山の上に献花所を設けた。埋設には今回の建設で生じる掘削土を利用している。献花所のまわりを円弧状の壁とベンチで囲み、その外側に既存樹を活かした公園をつくり、墓所と公園という日常・非日常を壁1枚背中合わせで共存させた。公園から献花所は見え、山は風景として映る。故人は山に抱かれ眠り、遺された人は山を前に故人を想い、故人に見守られ公園で過ごす。山の力を借り、特定の宗教色のない、自然と調和した施設をつくった。

### ●講評

福岡市中心部に辛うじて残る小さな丘に作られた合葬墓です。家族のつながりが薄れた現代社会では、家単位で墓を維持することは既に現実的ではなくなりつつあります。一般のお墓に納めることのできない遺骨をまとめて慰霊する場所である合葬墓を公共で整備することは、非常に現代的な社会福祉政策とも言えます。

この難しい課題に対して設計者は、自然の緑豊かな丘の中に遺骨を納める建物を埋め込み、その丘全体を古墳のような大きなお墓と見立てて、それに対峙する形で祈りを捧げるための場所を作りました。丘への視界を切り取るように設けられた門形のコンクリートフレームは、非常にシンプルな形状ながらも力強く祈りの場を規定し、彼岸と此岸との境界を示しています。その祈りの場を囲むように設けられた円弧状の壁と、そこから跳ね出すように設けられた屋根は、公園のように広がる屋外空間の中に雑音のない静かな空間を出現させ、外界の日常に対する結界を作っています。それぞれの構造物の大きさや高さは、この空間内外の様々な場所からの視線を制御するように緻密に計算されており、開放性と閉鎖性が絶妙にバランスされています。コンクリート面の微妙な表情の違いやランドスケープのデザインにも細かな配慮があり、周囲へと連続する歩道や入口周りの事務棟のデザインも含めて、霊園に相応しく時を経ても変わることのない美しく静謐な雰囲気を作り上げました。



撮影：中村絵



## 住宅の部 優秀賞 「見晴らしと暮らす家」

### ●設計趣旨

住宅街の傾斜地にある袋小路に面して建つ住宅である。見晴らしの良い景色を最大限に活かしつつ、1階を多目的なピロティとすることで、地域との繋がりを再構築する場となり、心地良く安心して豊かに暮らしていくことを目指した。

外周部に塀や門扉を設けず、傾斜地という立地を活かしながら、1階の柱とブレースで緩やかに地域と建物が繋がる形態としている。

長く過ごす生活空間は、全て2階の見晴らしの良い景色と隣り合わせとした。時間と共に移ろう風景が日常に溶け込み、日々の暮らしを豊かに彩ると共に、夜は生活の灯りがランタンのように柔らかく地域を照らす。住宅街の中にうっすらと活動が浮かび上がり、地域に安心感と温かさをもたらす。

### ●講評

高台からの眺望を最優先して、基本的な生活空間を全て2階に持ち上げた住宅です。そのシンプルな骨格と大きな開口は、特徴的な敷地の上で存在感を持っています。2階の居住空間には、端から端まで水平に広がる大きな窓があり、切妻屋根の梁を表した高い天井の下で、開放的な空間と素晴らしい眺望を獲得しています。これだけ開放性が高いにも関わらず、建物を包み込む外皮や窓の断熱性能を高めて、季節を問わずに快適な居住空間を実現しています。

趣味のアウトドアライフのための多様な使い方だけでなく、子どもたちの遊び場やご近所との交流の場にもなりそうなピロティ、狭いながらも子どもたちの隠れ家的場所になっている屋根裏空間と、機能が明確に規定されない贅沢な余剰空間もまた、建物の魅力と可能性を高めています。オーナー自らがデザイナーということもあり、家具や照明器具からスイッチ類に至るまで、隅々に気を配った統一感あるインテリアも洗練されています。自由に使えるような大らかで力強い空間構成の中で、対比的に細かなディテールと気遣いが見えることが、この住宅の魅力となっています。



撮影：UNGLE 瀬戸正直

## 一般建築の部 優秀賞 「さくさくファーム」

### ●設計趣旨

建主は建設業を営む傍ら、長年に渡り合鴨農法による無農薬米や野菜を育て、地域の子供たちに「食べること・生きること」について考える体験型のワークショップを毎年開催するなど、献身的な社会的活動を続けている。

この建築は、そうした活動の拠点となる地域交流の場を創出する事を目的として計画され、自然素材で包まれた木造建築が長閑な周辺環境と呼応するように静かな佇まいを見せている。内部は、建物の半分以上が地域に開放された空間で構成されている。前面道路側には地域食材展示室や交流の場として用意された半屋外の土間空間を配置し、地域に開かれた形式を生み出す事で新たな公共性が育まれる事をめざした建築である。

### ●講評

農地が広がる郊外に建つ事務所や店舗空間を持つ農業関連施設です。その長く大きな切妻屋根は、遮るものなく広がる風景の中でも、確固たる美しさと存在感を持っています。屋内外を仕切る大きな木製のガラス戸は、空間を一体的に連続させ、規則的に並ぶ木製の梁を表した高い天井と、土間のような味わいのコンクリートの床は、非常に開放的で大らかな屋内空間を作っています。木材で作られた可動家具や木質系の吸音仕上げ材も含めて、このシンプルに徹した建築は、農業施設らしくコストを抑えながらも機能的であり、ラフで多様な使い方にも適応可能です。こうしたシンプルな空間を作るのは、一見簡単のように見えますが、その背後には、緻密な構造計算や、経験と技術に裏付けられた設計施工上の工夫が必須であり、それがこの建築の美しさと存在感に繋がっています。

施設のオーナーには、この場所を地域のまちづくり拠点にしたいという強い思いがあり、建物周りの庭を整備するだけでなく、地域の方々の理解を得ながら道路沿いの隣地の庭まで一緒に整備してきました。日常的な手入れもまとめて行っているために、美しい景観が維持されていて、今では一帯が地域の顔として認識されてきたようです。



撮影：石井紀久

## (一財) 福岡県建築住宅センター理事長賞 「light and dark」<sup>ヒカリ ト ヤミ</sup>

### ●設計趣旨

光と闇。

建築の普遍的なテーマを、廃校運営の課題（集客/浄化槽/コスト）に沿ってつむいだ物語。

テーブルやソファ、照明など多くの装飾備品によって彩られていくであろうスペース（浄化槽問題より生まれた）に家具と空間を兼ねた楕円状の床と天井を挿入し、全身を真黒に覆った。暗がりの方が優しくつつむように天井高は1850mmとした。闇夜のようなプレートのあいだに立つと、光を知覚するものを照明と呼ぶのであれば、この2枚のプレートも照明だろうか、校舎北側の暗がりの風景は美しく輝きだした。

ありのままの光や風景を美しく。光のために暗さを。集客をめざしながら、そんなことを考えた空間だ。

### ●講評

廃校となった旧猪位金小学校の給食室を、カフェとして改装したプロジェクトです。非常に限られた予算の中で、既存浄化槽の汚水処理能力内に収まる範囲内でキッチンを計画し、その前に特徴的な楕円形の休憩場所を作っています。こうした空間の大きさだけは十分にある改修計画の場合、全てを綺麗に仕上げようとするとコストがかかりすぎます。手を入れる場所を必要最低限まで絞り込み、細かな家具などはワークショップで作るといった工夫をすることで、何とか実現しています。

この空間の中心には、特徴的な楕円形の二つのオブジェがあります。対になって床と天井を形作っているオブジェは、全てが真っ黒に塗られていて、その間に入り込むと、急に小さな個人の空間に閉じ込められて、そこから周りの風景を観察しているような、何とも不思議な感覚になります。学校建築らしく、自然光が十分に入る空間全体は、ステンレス製で光を反射するキッチンもあって明るい印象です。それに対して真っ黒に塗られた楕円は全ての光を吸収するブラックホールのようにも思えます。この空間への入口も、黒い円形をモチーフにしたドアで仕切られていて、異界への入口であることを示唆しています。現代では経験することが少なくなった闇の世界を、明るい雰囲気のカフェの中に出現させたことで、特徴的な非日常空間が生まれました。



撮影：YASHIRO PHOTO OFFICE